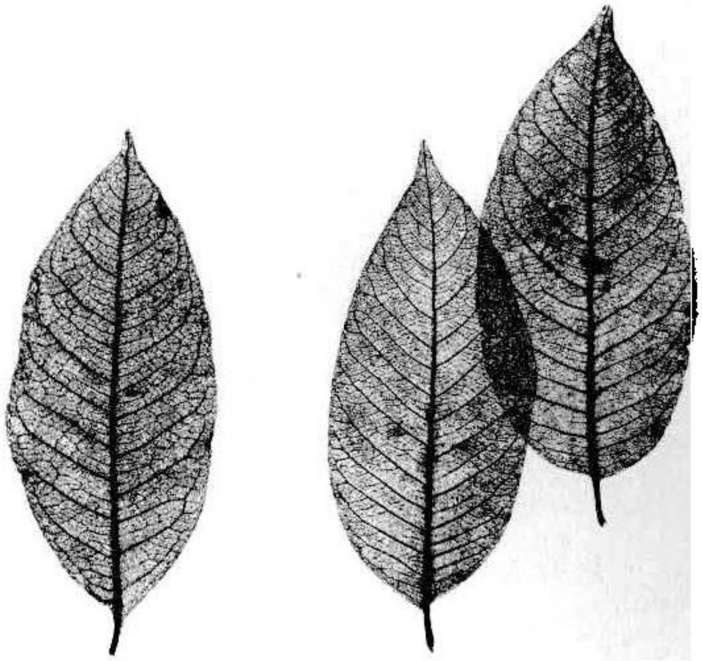
友を偲ぶ

遠藤周作 編

endo shusaku

知恵の森文庫



友を偲ぶ

遠藤周作／編

2004年12月15日 初版 1 刷発行

発行者――加藤寛一
印刷所――慶昌堂印刷
製本所――明泉堂製本
発行所――株式会社光文社
〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6
電話 編集部(03)5395-8282
販売部(03)5395-8114
業務部(03)5395-8125
振替 00160-3-115347

©junko ENDŌ 2004
落丁本・乱丁本は業務部でお取替えいたします。
ISBN4-334-78328-7 Printed in Japan

Ⓡ本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

友を偲ぶ

遠藤周作／編

知恵の森文庫

光文社

はじめに

追悼文を集めてここに一本にすることになった。

おそらく私の目にふれなかった素晴らしい追悼文もあったにちがいない。そういう名追悼文が本書から洩れた可能性も多いが、明治、大正、昭和にわたり余りに掲載紙、掲載誌の多いなかから選んだゆえにお許し願いたい。

もうひとつ、やはり昭和のものに——しかも戦後のものに偏ったことも否めない。弁解するわけではないが、私が知っている故人の姿が活写されているものをつい選んでしまったのである。なお、候補作品のなかから枚数の関係で惜しみながら割愛したものもある。まず御身内の追悼文である。また一人の故人に一つの追悼文という方法をとったため、埴谷雄高氏の野間宏氏への「そも若きおり」、野坂昭如氏の三島由紀夫氏への「わが三島体験」のような素晴しい文章も断腸の思いで見送った。そういう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

欠点をあらかじめお詫びして編集時の感想を書く。

死者に鞭うたずというが、たいていの追悼文は故人を率直に語るよりは、故人の長所や才能を強調し、生前の業績をほめたたえているものが多い。政界や経済界の人はこの傾向が強くて、生前はライバルとして血みどろの争いをしたのに追悼文では美辞麗句を並べたてて相手を美化しているので、読んでいてもあまり面白くない。美辞麗句が多ければ多いほど血が通っていない。

血の通っている追悼文を集めようとするとやはり文壇のものに偏してしまうが、仕方がない。

ここには形式的なものではなく、相手の生き方にたいする讃辞と共に批評があり、体ごとぶつかり合った思い出が語られているからだ。

たとえばこの本のなかの丹羽文雄氏の舟橋聖一氏についての追悼文。

愛惜と同時に舟橋聖一という作家の我儘や小児的な面が赤裸々に語られていて、故人を彷彿とさせるのである。

武田泰淳氏の三島由紀夫氏への追悼文、これも天才だった三島氏の色々な面を武田

氏の文学的立場から語った追悼文で、友情と共に批判が加わっているから面白いのだ。そういう追悼文を次々と集めてみると、いわゆる美辞麗句を並べた弔辞のつまらなさが目だってくる。

もちろん弔辞だし、遺族の前で読みあげるのだから、ほめないわけにはいくまい。しかしいろいろ読んでみると、弔辞でいいのはやはり文学者のものを除いてそう多くはなかった。

棺をおおいて事定まるというが、これらを読んでいると本当の評価は当の人が亡くなってから早くて一年、二年後に書かれるようである。

一周忌までは本当のところは遠慮しようというのが当人を評価する人たちの本音ではないだろうか。

しかし私に言わせると、所詮、他人の眼という鏡にうつった評価などは本当の故人の素顔ではない筈である。

それぞれが勝手な思わくで他人を見ているのだし、また我々は他人にうつる自分の姿が結局は影にすぎぬことも知っている。けだし自分の素顔を知る者は自分と神のみだからだ。

追悼文の弱点はそういう鏡にうつった影にしかすぎぬところにある。だから「あー、この人は他人から（あるいは社会から）こう思われていたのか」と思って読むより仕方がない。

もっとも、自分の存在理由（レゾンデートル）を他人や社会の評価だけにおく人ならば追悼文が絶対的なものになるだろう。しかし私はあまりその点を信用しない。

それは別に今日の他人や社会の評価が二十年のち、五十年のちに変るという（共産主義国家の政治家にはその例が多いではないか）事実だけではなく、もっと人間の心の底や深層心理の面から言って、他人の見る「外づら」はあまり信頼できないのである。

そういう意味で、追悼文を編集しておもしろかったのは、それぞれの執筆者が故人をぴたりと把えていると思っておられる点だ。

遠藤周作

友を偲ぶ　目次

はじめに——遠藤周作　3

I 愛惜

斎藤茂吉［昭和28年2月25日没］
頑固にして専横　北 杜夫　14

坂口安吾［昭和30年2月17日没］
坂口安吾の死　檀 一雄　26

梅崎春生［昭和40年7月19日没］
よき先輩梅崎氏　遠藤周作　38

小泉信三［昭和41年5月11日没］
冬の夜に風が吹く　古今亭志ん生　48

川端康成［昭和47年4月16日没］
川端康成との五十年　今 東光　56

今 東光［昭和52年9月19日没］
大々勝　今日出海　72

向田邦子	［昭和56年8月22日没］	花のある長女	秋山ちえ子	77
小林秀雄	［昭和58年3月1日没］	わき目もふらぬ人生	今日出海	84
有吉佐和子	［昭和59年8月30日没］	有吉佐和子の笑い声	戸板康二	91
夏目雅子	［昭和60年9月11日没］	わがTV女女伝	和田勉	104
川上宗薫	［昭和60年10月13日没］	川上さんのこと	色川武大	119
石原裕次郎	［昭和62年7月17日没］	戦士への別れ	石原慎太郎	125
大岡昇平	［昭和63年12月25日没］	大岡さんの優しさ	水上勉	131
手塚治虫	［平成元年2月9日没］	手塚治虫でさえ死んでしまうと過去になり、歴史になってゆく	中島梓	137
色川武大	［平成元年4月10日没］	聖・色川武大	筒井康隆	141
開高健	［平成元年12月9日没］	開高健の手	三浦哲郎	145

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

池波正太郎［平成2年5月3日没］　若いころの池波さん　司馬遼太郎　150
野間　宏［平成3年1月2日没］　野間宏のこと　木下順二　163

II 追悼

谷崎潤一郎［昭和40年7月30日没］　谷崎朝時代の終焉　三島由紀夫　172
三島由紀夫［昭和45年11月25日没］　三島由紀夫氏の死ののちに　武田泰淳　179
志賀直哉［昭和46年10月21日没］　終焉の記　阿川弘之　192
円地文子［昭和61年11月14日没］　華麗なる暴君　瀬戸内寂聴　205
美空ひばり［平成元年6月24日没］　孤児院で聴いた「悲しき口笛」　井上ひさし　231

井上靖［平成3年1月29日没］　フロレンスの壁と新疆の楊　大江健三郎　244

III 弔辞

横光利一［昭和22年12月30日没］　弔辞　川端康成　250
梶山季之［昭和50年5月11日没］　弔辞　吉行淳之介　254
檀一雄［昭和51年1月2日没］　弔辞　尾崎一雄　256
舟橋聖一［昭和51年1月13日没］　弔辞拾遺　丹羽文雄　261
植草甚一［昭和54年12月2日没］　弔辞　丸谷才一　270
芥川比呂志［昭和56年10月28日没］　弔辞　中村真一郎　273

石川淳［昭和62年12月29日没］
弔辞　安部公房　276

文庫版特別編
遠藤周作［平成8年9月29日没］
弔辞　安岡章太郎　280

解説　嵐山光三郎　285
初出誌一覧　292

Ⅰ 爱惜

斎藤茂吉　頑固にして専横

北　杜夫

子供の頃を追想してみると、父はなによりも恐ろしい存在、おっかない存在といえた。父はよく憤怒した。それも全身全霊をこめて憤怒するのである。自分がしかられればもちろんだが、他人がしかられているのを、唐紙ごしに聞いていても、やはり、背筋が冷たくなる思いをした。

あるとき玄関に客が見えて、父に面会を求めた。遠くから上京してきたアララギの会員らしかった。女中が、先生は風邪でねていらっしゃいます、と伝えた。しかし客は、地方から出てきたのだから、お顔を一目でも、と主張した。

しばらくすると二階から、大層な勢いで父が降りてきた。おれは本当に風邪でねていた。嘘だと思うのか。そう父は憤怒を爆発させた。客はすっかり恐縮してしまってへどもどしたが、父はそれでやめようとせず、およそ五分間ほど憤怒をつづけていた。

唐紙ごしに聞いていた私は、客が可哀そうであったし、それよりもまるで自分が怒られているように恐ろしかった。

父は父なりに子供たちに愛情を抱いていたのだが、その愛情が我が強すぎて、私たちにとってはやりきれないものといってよかった。

学校で試験があったあと、父は尋ねる。

「どんな問題が出た？」

それを答えると、

「みんなできたか？」

私はたいていできたと答えた。しかし全部できたというと嘘になるから、この問題だけはできなかったと答える。すると父は怒った。

「なんで、どうしてできないのだ？」

これほど横暴な論議はないと私は思う。それでだんだん私は嘘をつくようになり、みんなできたことにしてしまった。

幼いとき――小学校のはじめのころ――私が将棋を覚えたときには父はむしろ喜ん

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com